

文学的な文章読解において、自分の考えを再構成する力の育成

—ワールド・カフェの手法を用いた活動を通して—

長期研究員 日出山 亜希子

《研究の要旨》

本研究は、文学的な文章読解において問いに対する自分なりの考えを、他者との協働活動を経て捉え直す力の育成を目指したものである。思考を整理する「マイアンサーカード」を用いて自分の考えを創造した後、ワールド・カフェの手法を用いて交流を行い、他者の多様な考えに触れさせた。その上で、自分の考えを再構築させた。これらの手立てを講じたことで、自分の考えをより確かなものとして捉え直す力が向上した。

I 研究の趣旨

次期学習指導要領解説国語編の新設科目「文学国語」の目標には、「創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする」と掲げられている。このことから、文学的な文章を読解することで、生徒が内容や表現について自ら考え、創造的に考える力が必要とされていることが分かる。

これまでの自身の授業を振り返ると、講義型一斉授業が主であり、生徒自身が文章を読んで考えたり、他者と話し合ったりする活動を行ってはいなかった。生徒が問いについて自ら深く考える時間をつくることができていなかった。その結果、生徒は教師や他者の示す答えを待つという、受け身の姿勢をとるようになってしまっていた。このような授業では、生徒自身が文章を読み、創造的に考える力を育むことはできない。生徒一人一人が能動的に文章を読んで自分で考え、多様な視点をもってその考えに向き合うことができれば、より確かな自分の考えを創造する力を身に付けることができると考えた。

そこで本研究では、個—協働—個という活動のサイクルを経ることで、より確かな自分の考えを形成できると考え、協働活動の手段として、ワールド・カフェ^{※1}の手法を用いることとした。この活動を行った後に自分の考えを再度見つめ直し、より確かな考えを形成する力を育てたい。

※1 90年代にアメリカで始まった、メンバーの組み合わせを替えながら話し合いを続ける会話の手法

II 研究の概要

1 研究仮説

高等学校国語科「読むこと」の指導において、以下の手立てを講じれば、自分の考えを創造し、他者との交流で多様な視点を獲得することで、より確かな考えを再構成する力が育成されるであろう（図1）。

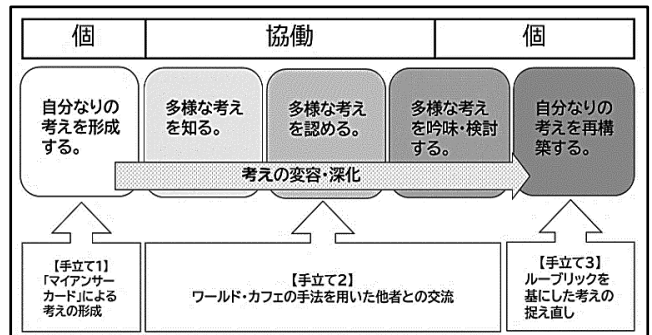


図1 研究のイメージ

- 【手立て1】「マイアンサーカード」による考えの形成
- 【手立て2】ワールド・カフェの手法を用いた他者との交流
- 【手立て3】ループリックを基にした考えの捉え直し

2 研究内容

(1) 【手立て1】「マイアンサーカード」による考えの形成

問いに対する自分なりの考えを形成するために、「マイアンサーカード」を用いる。「マイアンサーカード」は、本文から自分の考えの根拠となる部分と、「なぜそう考えたか」という理由を書き込み、そこから導き出される考えを書くワークシートである。根拠と理由、自分の考えを整理することで、客観性のある考えをもたせることができるようになる（図2）。

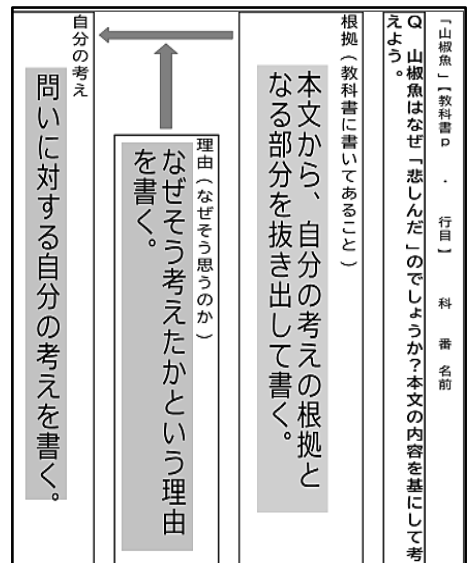


図2 「マイアンサーカード」

(2) 【手立て2】ワールド・カフェの手法を用いた他者との交流

問いに対する他者の考えを知り、自分の考えを広げたり深めたりするために、ワールド・カフェの手法を用いて交流を行わせる。この活動で多様な視点に接し、自分の考えを見つめ直したり、他者の考えとつなげたりすることによって、新たな気付きや考えを生み出すことができるようにする(図3)。

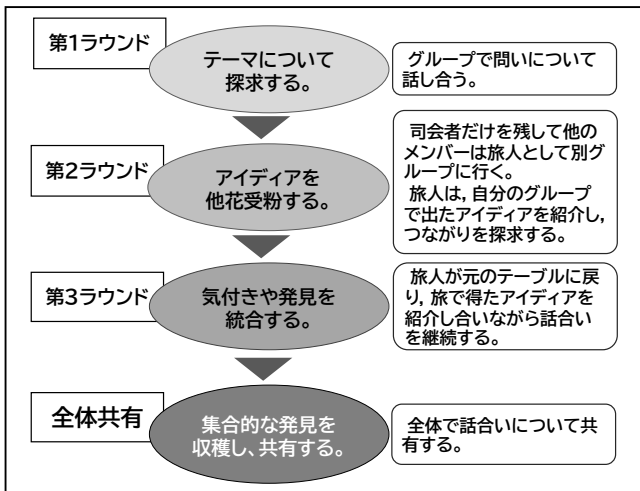


図3 ワールド・カフェのプロセス※2

※2 「ワールド・カフェをやろう」香取一昭 大川恒著を参考に作成

(3) 【手立て3】ルーブリックを基にした考えの捉え直し

ワールド・カフェの活動後に、自分の考えを捉え直し、文章化させる。他者との交流によって新たな視点を獲得し、更新された考えを整理するため、ルーブリックを用いる。ルーブリックを基に、より確かで、客観性や説得力のある考えを形成させる。

3 研究の実際

対象学年	第3学年	76名(2学級)
授業実践Ⅰ	現代文B	小説「山椒魚」(12時間)
授業実践Ⅱ	現代文B	小説「山月記」(14時間)

本稿では、授業実践Ⅱの実際を中心に述べる。

授業実践Ⅱにおいて、次のような単元学習の流れで授業を進めることとした(図4)。

時間	活動	手立て1	手立て2	手立て3
1	範読・語句の意味調べ			
2~10	「山月記」の本文読解	○		
11	「人虎伝」のあらすじを読む			
12	ワールド・カフェの実施	○	○	
13	考えの再構築			○
14	全体のまとめ			

図4 授業実践Ⅱ単元学習の流れ

「山月記」は、中島敦による短編小説であり、約60年間にわたって教科書に掲載され続けている作品である。漢文訓読調の文体で書かれており、難解な語句も多く、生徒たちにとっては読解が難しい文章である。しかし、人が虎になるという怪奇的な展開の物語に魅了される生徒は多い。本実践では、「山月記」は「人虎伝」という中国の古典が下敷きになっていることを生徒に伝えながら読み進め、本文読解後に「人虎伝」のあらすじを読ませた。

生徒は二つの作品を比べ、「山月記」は「人虎伝」よりも李徴の詩に対する執着や、人間として生きていた時の苦悩に関する描写が多いことに気付いた。そして「山月記」の方が李徴の内面の問題がクローズアップされていることを理解した。このことを踏まえて、作者が「山月記」で描きたかったことについて考察するために、本文と「人虎伝」のあらすじを読んだ後、次の問いを示した。

問い：作者は「山月記」で虎になった李徴を通して、何を描きたかったのか。

(1) 【手立て1】について

問いに対する自分なりの考えを、「マイアンサーカード」を使って整理させた。研究協力校での普通の授業では、自分で考えるのは苦手という生徒や、思いつきで根拠も理由もない考えを話す生徒が多く見られた。また、「根拠と理由の違いが分からない」という生徒も多い。「マイアンサーカード」を用いて、自分の考え・根拠・理由を区別して書くことで、思考の整理ができる。また、書いたものを振り返ることで、根拠と理由が自分の考えを支えるのに妥当なものであるかを確認することができ、考えに客観性をもたせることができる。これまで自分の考えを出すのが苦手だったという生徒も、「マイアンサーカード」を使用することで、自分の考えを導き出すことができるようになった(図5)。

いままでの授業ではなかなか自分の意見を出すことができなかったが、今日の授業では「根拠→理由→自分の意見」という感じで段階的に考えることができたので、自分の意見を出しやすくなった。

図5 「マイアンサーカード」についての生徒の感想

自分の考えの根拠と理由が明確であれば、他者に伝える際にも自信をもって話せることや、説得力のある考えが導き出せることにも気付いた。「マイアンサーカード」を用いることで、自分の考えを全く書けないという生徒が減少し、一人一人が自分の考えを形成することができるようになっていった(図6)。

また、「マイアンサーカード」を用いて形成した考えについては、これまでのような思いつきの意見ではないということで、生徒は自信をもって発表したり、他者に話したりできた。

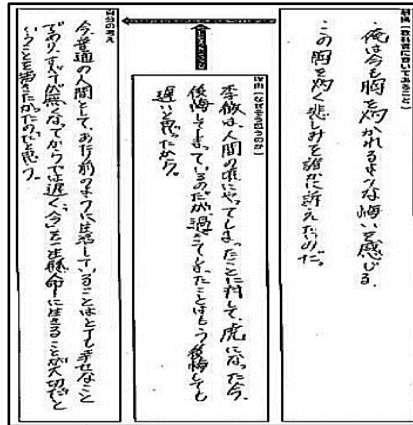


図6 生徒が書いた「マイアンサーカード」

(2)【手立て2】について

自分なりの考えを形成する個の活動の後、ワールド・カフェの手法を用いた協働活動を行った。

第1ラウンドでは、生徒は根拠を基に形成した自分なりの考えや、

活動の中で新しく生まれた考えを模造紙に書き込みながら話し合いを行った(図7)。



図7 話し合いをする生徒の様子

話し合いでは、「山月記には『月』の描写があるが、『人虎伝』にはない」ということに着目した生徒が多かった。「作品の中で『月』がどのような役割を果たしているのか」「『月』に込められたメッセージは何なのか」という点に言及していた。

第2ラウンドでは、司会者以外の生徒が別のグループに移動し、話し合いを行った。第1ラウンドで話題になった「月」の描写についての考えを広めていく様子が見られた。特に、「『月』は李徴を表現している」という考察は、生徒たちに影響を与えた。模造紙に書き込まれた他者の考えを見て、自分のワークシートに新たな視点として書き込んでいく様子が見られた。第3ラウンドでは元のグループに戻り、司会者が第2ラウンドでの話し合いについて説明し、戻ってきた生徒は、自分が得た新しい視点について話した。他者の意見を聞き、自分の考えがより強固になった生徒や、新しい考えが生まれた生徒の姿が見られた(図8)。

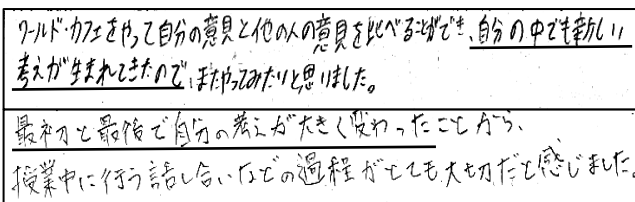


図8 ワールド・カフェを行った生徒の感想

ワールド・カフェの最終ラウンドである全体共有の時間に、それぞれが自由に他のグループの模造紙を見て回り、再度考えを形成するために、内容を確認したり、新たな視点を得たりした。

(3)【手立て3】について

ワールド・カフェの活動を経て、最初に形成した自分の考えをもう一度見つめ直し、最終的な自分の考えを400字の原稿用紙に記述した。記述の際にはループリック表(図9)を示した。規準を示すことで、生徒自身が書くべきことを理解することができた。

観点	A(5点)	B(3点)	C(1点)	D(0点)
内容	理由・根拠を明確にした自分の考えを述べることでできている。	自分の考えと理由・根拠が適切に述べられているが、一部分かりにくさがある。	自分の考えが述べられているが、理由・根拠との関連性が薄弱である。	自分の考えが述べられていない。
表現	(内容が5点の場合のみ) 本文を基に、自分の言葉を用いて適切に表現できている。	(内容が3点以上の場合のみ) 本文を基に、自分の言葉で表れてきたところがある。	(内容が0点の場合を除く) 抜き出しが多いが、記述できている。	記述ができていない。
文法		文法的な関連性が全くない。	(内容が0点の場合を除く) 関連性が2箇所以内である。	文法的に関連性が3箇所以上ある。

図9 原稿を再度書くためのループリック表

再度自分の考えを書く際には、根拠や理由が明確であるか、また、自分の言葉を用いて適切に表現できているかを重視した。ループリックを用いることで、ワールド・カフェで獲得した視点を整理し、より確かで説得力のある文章を書くことができるようになる。

III 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 生徒の変容から

「マイアンサーカード」への記入から最後の原稿を書くに至るまでの生徒の変容を見ていく。授業実践Ⅱでは、問いに対する自分の考えを「マイアンサーカード」を用いて整理させ、その後「最初の考え」として400字で考えをまとめさせた。しかし、ほとんどの生徒が、「マイアンサーカード」には考えを書いたものの、400字の記述をすることができなかった。

生徒Aは、最初の400字を書くことはできなかったが、「マイアンサーカード」の「自分の考え」には次のように書いた。

生徒Aの最初の考え

どんなに人として優秀であっても他人を侮ったり、人と交わることを避け、自分を守ることしか考えなければ理性のない獣でしかなく、心から獣になってしまうえば取り返しがつかなくなること。

生徒Aはこの考えをワールド・カフェで話し、模造紙に書き込んでいた(図10)。

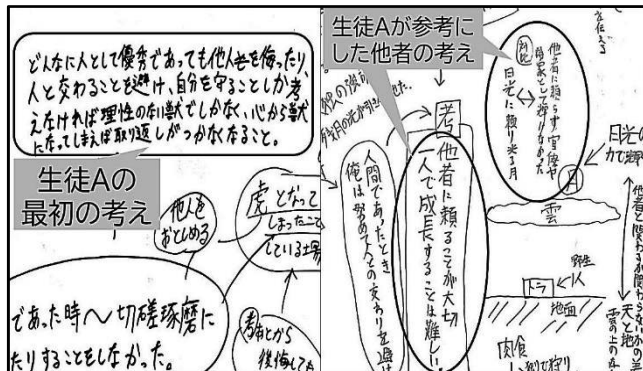


図10 生徒Aが書いた模造紙

生徒Aは、ワールド・カフェの話合いの中で「日光に頼らないと輝けない『月』は、他者に頼れない李徴を表している」という考えに着目した。「李徴は優秀であったが誰にも頼れず、獣になってしまった」という自分の意見と共通する部分と、新たな視点に気付いた生徒Aは、最終的に以下のように考えを形成した(図11)。

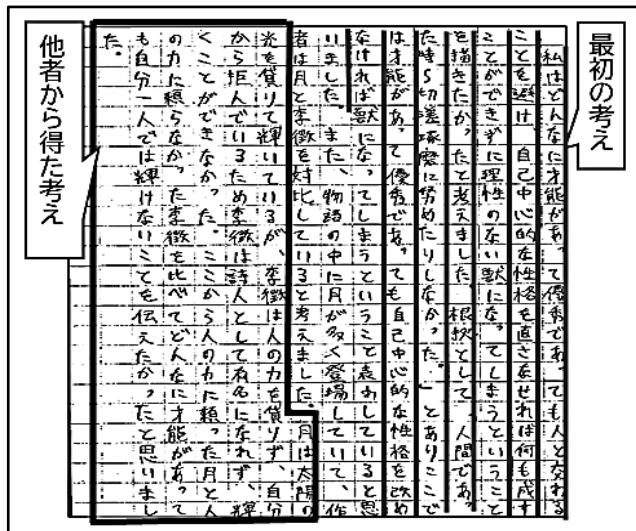


図11 生徒Aが書き直した原稿

生徒Aは、自分の最初の考えに他者の考えを付け加えることで、自分の考えを補強することができたと言える。その結果、最初は全く書けなかったが、最終的には350字以上の記述をすることができた。また、ループリックに基づく評価でも、A評価であった。

次に挙げる生徒Bは、クラスでも上位の生徒であり、最初から自分の考えをしっかりと記述することができていた。しかし、ワールド・カフェの活動を経て、自分の考えとは違う他者の考えに共感し、自分の考えを変容させた。最初の考えはやや独りよがりな内容であったが、再度形成したものは、より本文に即しており、また、本文の表現や李徴の生き方にも触れた考えとなり、A評価となった(図12)。



図12 生徒Bの最初の原稿(左)と書き直した原稿(右)

生徒Bは、ワールド・カフェの活動で自分の考えとは違う他者の考えを自分の中に取り入れることによって、視野が広がったと感じたことが分かる(図13)。

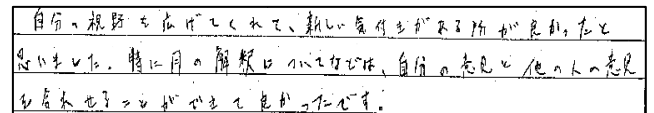


図13 生徒Bの感想

ワールド・カフェの活動を終えても自分の考えが全く変わらない生徒もいたが、「他者の考えを聞くことで、やはり自分の考えが一番だと思った」と話していた。自分の考えをより確かであると認めるためにも、他者との交流は有効であると分かった。

(2) ループリックを基に考えを捉え直す力について

ワールド・カフェの活動後に、実践I、IIのどちらも同じ評価規準を示し、自分の考えを再構築させた。10点満点で評価し、次のような結果となった(図14)。

実践Iと比べると、実践IIでは根拠と理由を基に自分の言葉で考えを表現する生徒が増加し、B評価以上の生徒が半数を超えた。また、平均点も0.6点上昇した。本研究において

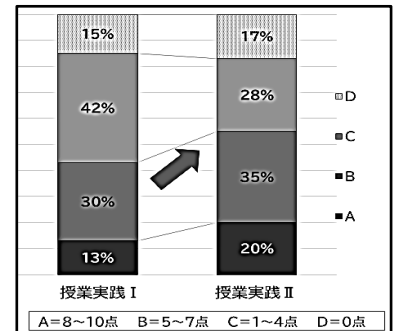


図14 実践I、IIの原稿の評価

講じた手立てによって、他者の意見を踏まえながら自分が納得できる考えにたどり着こうとする様子が見られ、より確かな考えを形成する力を高めることができた。

2 今後の課題

生徒が問いを考えたり、本文について深く考察したりする時間の確保も必要であると感じた。ワールド・カフェに関しては、ICTの利用等、様々な試みを取り入れることが可能である。今後、より充実した活動にしたい。